

宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第 34 回
 第 7 章 天沢退二郎先生
 その 2 『月曜児童文学』

1982（昭和 57）年 2 月 13 日の夕刻、パリ 10 区ボン・ヌーベルの韓国料理「竹園」で私たちが食事をはじめたころ、日本人の男性ふたりが店に入ってきて、となりのテーブルに案内された。ひとりは、天沢退二郎先生（1936～2023 年）だった。

満洲の宮沢賢治（あまんきみこさんの場合）

年に 2 回発行される、宮沢賢治学会イーハトーブセンター会報のことし（2026 年）の春の号（第 72 号『ひゅうぱちっ』3 月）の巻頭は、あまんきみこさんのエッセイ「言葉のちから一思いだすまにー」だった。「童話集『風の又三郎』は小学校低学年の頃、本棚に入ったうれしい一冊でした。／私はその本を繰り返し読み、作品の世界に入り込んで遊びました。」と書き出される。それは、1939（昭和 14）年に羽田書店から刊行された宮沢賢治の童話集『風の又三郎』だが、敗戦後、あまんさんの一家が大連から引き揚げるときには、持ち帰ることができなかった。

後年、あまんさんの作品世界は、ファンタジーといわれたり、メルヘンといわれたりしたけれども、あまんさん自身は、「ファンタジーやメルヘンをめざして書きあげようという気持にはならなかった」「それでも、書きたいことを「ほんとう」と感じなければ書けない思いを続けた」という。

70 代のおしまいころになって、あまんさんは、童話集『風の又三郎』の、それも、編者である坪田譲治先生が巻末に寄せた「この本を読まれた方々に」に再会する。私の手もとの復刻版（『名著復刻 日本児童文学館』第 1 集、ほるぷ出版 1977 年）で確認すると、全部で 26 ページもある長い文章だが、坪田先生は、「ホンタウ」をキーワードに賢治の世界を語っている。「童話の中では、草や木がものを言ったり、動物などが人間のやうな生活をしてゐる。あれはホンタウですか。草や木がホンタウにものを言ひますか。」／それは言ひません。言ひませんけれども、童話がホンタウであることは、別のところにあるのです。」というふうに。

読み終えたとき、私は不思議な感慨にうたれました。書かれていることさえ覚えていない坪田先生の「あとがき」は、私の遠いところをするすると通りぬけたのではなく、そのまま沈んで幼い心の芯にとどいていて感じたからです。

七十年近くも前に出あっていた「ホンタウ」は、いつ自分の「ほんとう」になっていたのでしょうか。

満洲の宮沢賢治（天沢退二郎先生の場合）

現代詩文庫版『天沢退二郎詩集』（思潮社 1968 年）に収められている「自伝あるいは損をするための書き流し」には、つぎの一節がある。室町在満国民学校 2 年生のころのことだ。満洲の学校である。

同じクラスに横田のり子というやせぎすの美少女（と当時は思っていた）がいて、この子には大切な『グスコブドリの伝記』の豪華本を貸したきり返してもらえなかったのがいまもうらめしい。この本は函入り菊版、二色刷のさし絵いり

で、見返しに「雨ニモマケズ」が入っていたと思う。八畳に腹ばいになって『グスコーブドリ』を読み出し、一気に読みおえてふと気づくと、もう夕方で、部屋の中もすっかりうすぐらくなっている。ながい人生をひとつたどりおえたという実感。(カッコ内原文)

「『グスコーブドリの伝記』の豪華本」というのは、やはり、羽田書店から 1941（昭和 16）年に刊行された童話集『グスコーブドリの伝記』だろう。これも、復刻版（『名著復刻 日本児童文学館』第 2 集、ほるぷ出版 1976 年）を見ると、巻頭に「雨ニモマケズ」が掲載されている。巻末は、挿絵を描いた画家の横井弘三の「本書の装幀と挿絵に就いて」。2 ページあまりの短い文章だ。

戦時下の満洲で子ども時代をすごした、あまんきみこさんと天沢退二郎先生のどちらもが羽田書店版の宮沢賢治童話集を愛読したことを書いている。

天沢先生は、上記の引用箇所のすぐあとに「『銀河鉄道の夜』『風の又三郎』は父の知人の西川さんに借りて読む。」とも記している。この『風の又三郎』も、羽田書店版だったのではないか。

あまんさんは、『グスコーブドリの伝記』のほうは読んでいないとお聞きしたことがある。『風の又三郎』が刊行された 1939 年にあまんさんは 8 歳だが、『グスコーブドリの伝記』が刊行されたころは、国民学校の高学年だ。もう童話集を買いあたえられる年ごろではなくなったということだろうか。

賢治童話集を愛読したふたりの子どもは、やがて、童話を書く大人になる。

賢治を読む少年

天沢退二郎先生が亡くなったのは、2023（令和 5）年 1 月 25 日だった。86 歳。2 月 5 日には、JR 総武線・稲毛駅前のホールでお通夜が行われ、私も参列した。詩人の吉増剛造さんら何人かが弔辞を読まれた。吉増さんは、「ありがとうね、天沢さん。」といって、しめくくった。（注 1）

3 月末刊行の『現代詩手帖』4 月号の特集は「天沢退二郎の彼方へ」、そのはじめに、福間健二、野村喜和夫、小笠原鳥類の 3 人による座談会「アマタイ、その非現実空間のゆらぎ」が掲載されている。3 人の詩人は、それぞれ「天沢退二郎の 10 篇」を選び、座談会のあとのページには、それをもとに編まれた「天沢退二郎代表詩選」ものっている。

野村喜和夫さんは、天沢退二郎の詩歴を五つの時期に分け、それに「番外」もくわえた六つに 1～3 編をあげて、「10 篇」としている。詩歴の区分の最初は「賢治を読む少年」、作品は、第一詩集『道道』（舟唄編集部 1957 年）から「草のうた」（「ゆくりなくもぼくは草原に片足で立った／そうしなければ草になることができなかったから……」）が選ばれている。

つづいて、5 月には、『道道』までの道道』（阿吽塾発行）が天沢退二郎著として刊行された。八つの章に分かれているが、Ⅰは「ぼくの作品集」、天沢少年が 1948（昭和 23）年ごろに書いた詩を「ぼくの作品集【津田沼小学校（五・六年）時代】」と表紙に記してまとめた 200 字詰め原稿用紙 26 枚分が掲載されている。最初は、末尾に（一九四八・七月三十日）と日付のある「朝の踏切」（「遠いかすみの中から電車の姿がうっすり／と現れ／斜断機^(ママ)がきいっとおりる／人、／車。……」）だ。Ⅱは中学 3 年生のときの手書きの詩をまとめてホチキスで綴じた詩集『天鐘詩抄』、

Ⅲ～Ⅴは高校生から大学1年生にかけて使われた手帳3冊に書き留められた詩とつづく。敗戦後、天沢先生は、おとうさんの故郷である新潟県に引き揚げたが、そのあとは、千葉県で暮らすことになる。

『『道道』までの道道』には、第一詩集刊行以前に書かれた102の詩が収められた。すでに、1972（昭和47）年刊行の『天沢退二郎詩集』（青土社）に「初期詩篇」として20編が、それに4編をくわえた「少年詩篇」が1978（昭和53）年刊行の『道道 付 少年詩篇 道道補遺』（書肆山田）に掲載されたが、『『道道』までの道道』によって「賢治を読む少年」の時期がいっそう拡大され詳らかにされた」とは、同書にはさみ込まれた葉にも文章を寄せた野村喜和夫さんのことばだ（「天沢退二郎の「死後の生」のために」）。

野村さんは、『現代詩手帖』の追悼特集で、「賢治を読む少年」の時期の作品として『道道』の「草のうた」をあげたけれども、『道道』で私自身が好きな作品は、冒頭の「ぼくの春」だ。「青ざめた泥濘はインクの襞のかなしさ／遠い空のへりではかすかに／高くハモンドオルガンが鳴る……」——二つの連で構成される詩は、こう書き出される。ハモンドオルガンに胸が高鳴る。そして、第1連のおしまい、
「褐色に落ちた高杉のこずえの方で／ほら あのようにハモンドオルガンが鳴る」——また、ハモンドオルガンが鳴るのだ。

詰襟の学生服

雑誌『ユリイカ』の1979（昭和54）年8月号の特集は「妖精物語 ファンタジーの深層へ」、天沢退二郎・いぬいとみこの対談「甦るファンタジー」も掲載されている。まず、天沢先生が「お会いするのはじつは二十年ぶりぐらいなんですね。」とあいさつする。

天沢 あのかときは児童文学者協会の外国文学研究会……いろんな部会があったんですね。例のケネス・グレイアムの『たのしい川べ』っていうやつを、あのときはいぬいさんがレポーターで。

いぬい そうですか、お恥かしい。どういうことを喋ったのか……（笑）

天沢 ぼくはまだ詰襟の学生服で、あのときは非常に集まりが悪かったんですね。ぼくともう一人いたかどうか。

「賢治を読む少年」は、詩を書くだけではなく、児童文学を読み、書く大学生にもなった。

『ユリイカ』のそれより前の号、1971（昭和46）年5月号の特集は「60年代の詩と詩人」で、共同討議「現代詩の危機 今日作品と言語」に、天沢先生は、川村二郎、大岡信、岡田隆彦とともに議論にくわわっている。この特集のころには、天沢退二郎は、1960年代を代表する詩人、60年代詩人と呼ばれるようになっていた。共同討議のはじまりで、川村二郎が天沢作品の印象を語るところがある。——「ぼくは天沢さんの作品は（中略）核になっているものはメルヘンだという気がする。なにも賢治をやっているからというんじゃない。いやむしろメルヘンというものに対する指向があるから賢治にもあれだけ打ち込むことができる。」

天沢先生は、「そのメルヘンということばは、どういう意味合いであるのか教えていただきたいのですが。」と聞き返す。メルヘンはドイツ語だから、ドイツ文学

者でもある評論家の川村二郎にこんなふうにあざねたのかもしれない。川村は、「幼児的なものということ。」と答えて、さらにつづける。

川村 （前略）子供は大人になっちゃうわけで、大人がまた子供になろうとすることは意識的な行為でしかありえない。意識的になればもう子供じゃない、というディレンマのあるところで、どうやって第二のイノセンスというものを掴もうとするか、というような天沢さんのお仕事の印象ですね。

川村の「第二のイノセンス」ということばは、童話や児童文学という仕事の根源にかかわるものだとも思うのだけれども、この発言をうけて、天沢先生が語りはじめる。

天沢 （前略）ちょうど一九五〇年代の末まではぼくはむしろ児童文学の専門家になろうと思っていた。童話を書き、児童文学の研究会に出るとか、そういう専門家気取りをしかけていた時期があった。まあいま活躍している古田足日とかいぬいとみことか、ああいう人たちといろんな会で話したりということが五〇年代末まであって、そこでだいたい六〇年のあたりでぼくは踏ん切りをつけて決然とやめたわけなんです。そしてこの十年間を来た。ところが逆に、いま言われたメルヘン的なものに非常に素朴な形で付き合おうとした時期から足を洗って、全く隔絶したところでやろうとしてきたこと、やってきたことは、やはりそれと別なことではなかったということを感じている。ただ、そのとき童話とか少年小説とかの専門家気取りになることをやめずにいられなかったいやなことが幾つかあったわけです。

1957（昭和 32）年 4 月、天沢退二郎は、自ら編集発行人になって、謄写印刷の雑誌『ふくろうの赤い眼』を創刊した。1 号の表紙には「児童文学季刊」と記されている。同人は天沢をふくめて 6 人、（あまざわ）の署名の編集後記は「一人か二人でも仲間ができたなら童話の同人誌を出したいという願いがついに実を結んだのはなんともいってもうれしい。」と書き出されている。発行所は、東大三鷹寮・天沢方「ふくろうの赤い眼」の会だ。天沢先生の詰襟の学生服の時代だろう。（注 2）この雑誌は、同年 7 月発行の 2 号まで出て、そのあとは発行されなかったと思われる。

1958（昭和 33）年 1 月には、「児童文学学生の会創作部会」有志（月曜児童文学会）による同人雑誌『月曜児童文学』が創刊された。天沢退二郎は、編集責任者ふたりのうちのひとりになっている。1 号の最終ページの同人名簿に名前があるのは 11 人、日大、日本女子大など、いくつもの大学から参加している。天沢退二郎は、2 号に童話「土曜日の終り」を発表、3 号にコラム「賢治研究雑感—「宮沢賢治ノート」（中村稔）批判—」を書いたあとは、誌面からすがたを消す。このころに、児童文学に「踏ん切りをつけて決然とやめた」のだろうか。「やめずにいられなかったいやなこと」があったのだろうか。（注 3）

このあとの天沢退二郎は、安保闘争の時期をはさんで、『赤門詩人』（1958 年 8 月創刊）、『暴走』（1960 年 7 月創刊）、『×（バッテン）』（1961 年 6 月創刊）、『凶区』（1964 年 4 月創刊）といった、いくつもの詩誌をへて、60 年代の詩状況の中心になっていく。（注 4）

『夢でない夢』

1973（昭和 48）年に大和書房の『夢の王国』シリーズの 1 冊として刊行された、天沢退二郎の『夢でない夢』は、佐伯俊男の挿画が印象的な童話集だ。巻末には、大学生時代に書いた童話、「土曜日の終り」「夜の少年たち」「月夜のふくろう」の 3 編も収録されている。「土曜日の終り」の初出は先の『月曜児童文学』の 2 号（1958 年 4 月）、「月夜のふくろう」の初出は『ふくろうの赤い眼』の 2 号（1957 年 7 月）だ。『夢でない夢』の「おぼえがき」には、こう書かれている。

これら大学生時代に書いた童話には、賢治童話の幼稚な模倣ぶりが目立って恥ずかしいことから、人の目にふれることを慮ってきたが、愛着もまた否みがたいので、散佚を防いでこの機会に収録しておくことにする。

これらのうち、「土曜日の終り」の冒頭は、こうだ。

そとでは寒そうなこがらしが吹きあれて、教室の窓ガラスはひっきりなしにガタガタなった。

土曜日の午後。六年三組の反省会がやっと終わりかけていた。

ここから、天沢退二郎の最初の長編ファンタジー『光車よ、まわれ！』の書き出し（「さっきから、まるで校舎をたてにゆさぶるばかりに雨がふっている。……」）を連想するのは、私だけではないだろう。『光車よ、まわれ！』は、1973 年に筑摩書房から刊行された。

（つづく）

（注）

- 1、吉増剛造さんの弔辞は、『現代詩手帖』2023 年 4 月号の特集「天沢退二郎の彼方へ」に「ひとり、星と星の間を」のタイトルで掲載されている。
- 2、『『道道』までの道道』（前掲）巻末の「天沢退二郎 アルバム」には、詰襟の学生服の写真（1959 年）もある。
- 3、宮田航平さんが 2011（平成 23）年度に武蔵野大学文学部に提出した、天沢退二郎の児童文学をテーマとする卒業論文を作成している途中で、国会図書館所蔵の『月曜児童文学』をさがし出した。私は、そのときのコピーで、はじめて、この雑誌を見た。今回、国会図書館のデジタルコレクションで再確認したが、国会図書館の所蔵は 11 号（1961 年 8 月発行）まで。ところが、大阪府立中央図書館国際児童文学館には、12 号はないが、13 号（1962 年 4 月発行）まで所蔵されている。『ふくろうの赤い眼』も、大阪に所蔵されているものを見た。
『月曜児童文学』からは、詩人・尾形亀之助が編集した大人のための童話雑誌『月曜』（1926 年 1 月創刊）を連想する。創刊号に、宮沢賢治の「オツベルと象」が掲載されている。
- 4、この時期の天沢退二郎については、これらの詩誌を天沢とともに刊行した渡辺武信の『移動祝祭日 『凶区』へ、そして『凶区』から』（思潮社 2010 年）を参照のこと。